広告　企画・制作　LEXUS NEW TAKUMI PROJECT 実行委員会

地元の自然と水で育んだ和紙にのせて想いを込めた言葉を贈る「ことばもり」

「LEXUS NEW TAKUMI PROJECT」（主催：LEXUS）は、日本各地で地域の独自性や伝統技術を生かし、新しいモノづくりに挑む「匠」を応援する。

レクサスが日本全国の「匠」のモノづくりを応援

本プロジェクトは2016年、プロジェクトのスーパーバイザーに、放送作家として多くのヒットを手がけ、くまモンの生みの親でもある小山薫堂氏を迎え、生駒芳子氏（ファッション・ジャーナリスト/アート・プロデューサー）、下川一哉氏（意と匠研究所）らをサポートメンバーに発足。以来、全国の若き匠の挑戦が刻まれたプロダクトは、ふるさと納税の返礼品への指定やロックフェラー家主催のチャリティイベントへの出品、上海での国際的な展示会への出品など、目覚ましい活躍を見せている。

3年目となった今回は、全国47都道府県から計50名の若き匠が選出。昨年夏、レクサスギャラリー高輪で行われたキックオフ・セッションを皮切りに、サポートメンバーが実際に工房を訪ねるエリア・コンサルティングを経て、匠は自身のアイデアを磨き、プロダクトの制作に取り組んだ。

1月24日、東京ミッドタウン日比谷で行われた発表会では、国内外の百貨店・セレクトショップバイヤー・メディア・デザイン関係者などに向けて自身のプロダクトをプレゼンテーション。世界へ羽ばたく足がかり、ビジネス拡大のきっかけとなる大きなチャンスを手にした。

また当日は、2019年の新たな取り組みとして、全国の匠と、世界的クリエイター（コラボレーター）が、新たなプロダクトを制作するコラボレーションプログラムを発表。コラボレーターである隈研吾氏（建築家）、廣川玉枝氏（SOMARTA クリエイティブディレクター）、森永邦彦氏（ANREALAGE/代表取締役社長・デザイナー）、辰野しずか氏（クリエイティブディレクター/プロダクトデザイナー）が登壇し、想いを語った。2019年秋頃には、完成したコラボ作品、過去のプロジェクトから生まれた匠たちの作品を披露するイベントを京都の地で開催することを合わせて発表。プロジェクトも一歩進化している。「伝統」を守りながら「新しい」感覚やテクノロジーを吹き込む。「地域」の特性を深めながら、その魅力を「世界」へ広く発信する。「LEXUSが掲げる「二律双生」を、地方創生×モノづくりの視点で実現するプロジェクト。岡山県選出の匠、備中和紙職人の丹下直樹さんのモノづくりへかける思いと完成した作品を紹介する。

1月24日、プレゼンテーションにて

スーパーバイザー
小山 薫堂氏

1964年6月23日 熊本県天草市生まれ。日本大学芸術学部放送学科に進う。「進め!電波少年」や「料理の鉄人」など、数多くのヒット番組の企画・構成に携わる。執筆活動の他、京都造形芸術大学副学長、地域・企業のアドバイザー、下鴨茶寮主人などを務める。「くまモン」の生みの親でもある。

祖父の技を継ぐ伝統の和紙作り

備中和紙は、旧備中町（現高梁市）で伝えられていた「清川内紙（うちがみ）」を源流とする。戦後、手漉（すき）きの和紙が廃れる中、地域で唯一、家業として技術を受け継いでいたのが丹下さんの祖父、哲夫さん。廃業も危惧されたが、「倉敷民藝館」初代館長で民藝運動家・染色家の故外村吉之介氏に見いだされ伝統を守った。工夫と研究を重ねながら祖父が作る和紙は、外村氏によって「備中和紙」と命名され、その品質は高く評価された。

和の趣あふれる工房の外観

祖父の工房が幼少時からの遊び場でもあった丹下さん。身近で和紙作りに触れるうち、家業を継ごうという思いが自然に育まれ、「伝統の技術を途絶えさせるのはもったいない」と20歳で本格的に後を継いだ。工房はもちろん、道具類もすべて祖父が使っていたものを今も大切に使い続けている。一方で、新たな仕組みづくりにも取り組む。乾燥は、従来の天日干しのほか、特注のステンレス板など、作りたい和紙の特徴によって乾燥法と道具を使い分けている。

簀桁（すけた）で手際よく和紙を漉く丹下さん

丹下さんは祖父から直接和紙作りを教わったことはない。幼いころから間近で見ているうちに作業ぶりは自然に身についた。決して手を抜かない丁寧な和紙づくりの姿勢を受け継ぎながらも、備中和紙の可能性を広げる挑戦を続ける丹下さんに、祖父は口を挟まなかったという。しかし、平成25（2013）年、和紙の特質をそのままに、プリンターでも使えるよう加工したA4サイズの「KAMI」で「日本民藝館展奨励賞」を受賞すると、「ようやった」と初めて認めてくれ、「それを機に引退を決めたのかもしれない」と懐かしむ。

岡山県産「ミツマタ」を原料とする備中和紙は、「ミツマタ」を水にふやかすことから乾燥まで、その製造工程は数多いが、丹下さんはすべてを自分でこなす。中でも特に気を使うのは「紙漉き」と「乾燥時にしわを防ぐ刷毛使い」。出来上がりの品質を決める最も重要な作業だ。どの工程でも心掛けていることは、「まあ、いいか」という妥協を絶対にしないこと。こだわりも妥協も、紙の品質となって現れる。

「和紙の使い方や評価は、使う人が決めるもの」という丹下さん。だからこそ、出てくるアイデアを形にしながら、厳しい品質基準を自ら設けて、あくまでも文字を書くための道具としての和紙を作る。「その基本的な考えは変わらない」と言い切る。

新たな視点で和紙の可能性を広げる

プロダクトとして二種類のお守りを制作したが、最初に考えたのは布バージョンのお守り。倉敷市美観地区内の「倉敷本染手織研究所」で作られた布を使い、中に入れる内符に手漉きの和紙を使う。その和紙は見えないが、「自分の仕事は主張しない方がいい」というスタンスだった。

エリア・コンサルティングで川又氏と

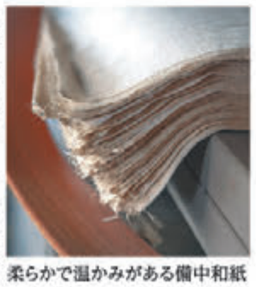
キックオフ・セクションで「和紙バージョンのお守りも作ったら」と提案され、制作に取りかかったが容易ではなかった。岡山県産の「ミツマタ」100％を原料に、強度を高めた漉き方で作ったにもかかわらず、布同様に縫製すると、どんな縫い方を試みても破れてしまうため、設計を変更。試行錯誤の末、祈りの形を取り入れ、のり付けする方法に落ち着いた。また、小山氏の指導で、相手に伝えたい想いを小さな和紙に書いて内符と一緒に入れるようにした。

エリア・コンサルティングで訪れたサポートメンバーの川又俊明氏からは貴重なアドバイスを受けた。その一つが和紙の色展開。丹下さんが手がける草木染のうち、ピンクやベンガラの赤は、変色したり、濡れると手や衣類に色がつく。模索しながら他の色も検討した結果、白のみにして、お守りに添える絹製の三撚紐（みよりひも）の色を選べるようにした。

丹下さんが驚いたのが、「いろいろな願意の札を用意して、一つのお守りに複数下げられるようにしては」というアドバイスだ。もともと、願意が一目瞭然な上、誰かに贈る場合でも願意が明確に伝わると、札を外に下げるアイデア自体は考えていたが、「複数下げるという発想は思いつかなかった。とてもありがたかった」と振り返る。

どちらのバージョンにも岡山産の他の素材を加えた。内符を包み、お守りに柔らかな手触りを与える素材には、倉敷市連島町で生産されている倉敷脱脂綿を採用。さらに、マスキングテープで封をする。和紙・脱脂綿・マスキングテープという地元の素材と、見えない内側も手を抜かない手仕事によって、より意義深いプロダクトになり、お守りであると同時に、言葉を贈るメッセージツールとして、小山氏から「ことばもり」と命名された。

完成プロダクト「ことばもり」和紙バージョン


柔らかで温かみがある備中和紙

プレゼンテーションで高評価を得て、同氏のもとで新たな企画が進行中だ。「このお守りを持つ人の気持ちがほんの少しでも豊かになれば」と丹下さん。

プロジェクトを通して得たのは「視点の切り替え」。第三者の視点からの提案で、予定になかった和紙のお守りが実現し、「面白いものができた」と満足しているが、こうした視点は「自分にはまだまだ足りていない」。

「お守りのアイデアはまだある」という。祖父から受け継いだネットワークと、プロダクト制作で得た協力関係をもとに、視点を広げ新たな方向を目指している丹下さん。今後のプロダクトが期待される。

丹下 直樹
岡山／備中和紙職人

1979年、岡山県倉敷市出身。千年を超える歴史をもつと言われた和紙作りを伝える家業を継承し「備中和紙」の生みの親となった丹下哲夫の孫にあたり、2代目後継者。岡山県郷土伝統的工芸品となった「備中和紙」に新たな価値を創造するべく日々研鑽を積んでいる。平成25年度日本民藝館展奨励賞受賞。

LEXUS NEW TAKUMI PROJECT